周辺からの記憶 28

2018 年度　むつ・多賀城

村本邦子（立命館大学）

2020 年度は家族応援プロジェクトの最終年になるはずだったが、COVID-19 で延期となり、今年はプロジェクトもリモートで実施することになった。半年前の私だったら嫌がって絶対にできなかったと思うけれど、連休明けから授業はすべてオンラインとなり、しかも、司法臨床という集中講義では院生たちの議論やロールプレイ演習を取り入れなければならなかった。工夫を重ねながらやっていくと、だんだんと扱い方がわかってきて、ある側面からは、対面で行うのと違った利点があることもわかってきた。もちろん、共に身を置き、空気を共有しながら行うものには代えがたいものはあるけれど。それで、プロジェクトも、リモートでやれることをやってみようと思えたのだ。危機への柔軟な適応をレジリエンスという。ただし、状況を見極め、危機に適応するのではなく、抵抗、つまりレジスタンスを貫くことも重要だ。

この原稿を書いている 2020 年 8 月 28・29 日、初めてのリモートプロジェクトをむつとやった。事前学習の報告では、院生たちの希望により、六ケ所村の菊川さんと大間のあさこハウスのことを紹介した。ちょうど、今回書いた内容だ。また、フェイスブックの思い出が、昨年の恐山と共に、一昨年の菊川さんとあさこハウス訪問の記録を見せてくれる。こうやって、状況に合わせながら、決めたことを十年間、毎年重ねてきたのは、我ながらなかなかのことだと思う。

2018 年 8 月下北

8 月 28 日（火）～29 日（水）

六ケ所村

毎年恒例、むつプロジェクト前のフィールドワーク。8 月 28 日（火）、お昼に青森空港に着いたが、何たること、帰りの JR チケットを忘れてきたことに気づく。レンタカーで、いったん新青森駅まで行き、チケットを再購入。田舎館村の田んぼアートを見て、三沢へ向かう。

寺山修司記念館で中村さんをピックアップし、六ケ所村の花とハーブの里へ。鎌仲ひとみ監督（2007）『六ケ所村ラプソディー』の舞台だ。2004 年、六ケ所村に、原発で使った燃料からプルトニウムを取り出す再処理工場ができた。この工場の風下に農業地帯が広がっていた。菊川恵子さんは、毎年、そこでチューリップ祭りを開催し、隣接の農家たちと一緒に、再処理計画への反対運動を続けていた。

菊川恵子さんは DVD と比べるとほっそり痩せていて（病気をされたらしい）、お疲れのようだった。8 月というのに、夜には薪ストーブに火を入れなければならないほどの冷え込み。ひじきご飯に味噌汁、サンマ、ほたてといかの刺身、サラダと豊かな土地の恵みを頂く。お風呂は壊れているとのことで、温泉施設「ろっかぽっか」へ行く。立派な建物で、太陽光をどのくらい使っているなど、エコ表示がしてある。なんだか皮肉な感じがする。

翌朝は、フライパンで焼いたパン、サラダ、コーヒー。ルバーブジャムとブルーベリージャムに梨と西瓜。地元で採れた自然のものばかり。青森では、お盆過ぎた西瓜が一番おいしいのだそうだ。いろいろと話を聞かせて頂く。

子どもの頃、このあたりは原野という感じで、そこを人力で切り拓いて畑にしてきた。自分は県外に出ていたが、核燃のことがあって帰ってきた。最初は周囲から変なことしているという眼で見られていたが、チューリップ祭りを始めてから受け入れてもらえるようになった。でも、2010 年が最後。近所の人がトラクターで耕してくれたりしたが、鼠が出てダメになった。

可能性はいくらでもある土地なのに、選挙のたびに多額の裏金が動くので、どうしようもない。日本だけが世界に逆行して、どう見ても長くは続かない。現在は、WWOOF（World-Wide Opportunities on Organic Farm）という有機農法の農業体験ボランティアの受け入れをしている。

1971 年ロンドンで始まったもので、日本の事務所は札幌にあって、「泥だらけのスローライフ」を掲げ、全国何百ヶ所かにホストがいる。もともと、自分で食べるものは自分で作りたいと、畑を借りて、子どもたちと無農薬でやっていた。

世界中からウーファーがやってきて長期滞在する。おもしろい出会いもたくさんある。六ケ所のことを知らずに来る若者も多い。ここに来れば、壁の周りにたくさんの関連メッセージがあるので、そこで初めて六ケ所を知る。最近イギリスから来た青年はすごく気が合って関係ができたと思ったところで、急に六ケ所のことを知って、

慌てふためいて荷物も忘れて逃げて行ったということがあった。

「もともと市民活動などしようと思ったこともなかった。ふつうに自分の暮らしをしたいと思っているだけなのに、こんなことになってしまった。本当は一人の時間が好きなのに、忙しくてなかなか一人になれない。本当はもっと優雅に自分の時間を生きたかった」と、菊川さんは静かにため息をつく。

六ケ所原燃 PR センターと東通村のトンツゥビレッジへ行ってみた。2012 年に訪れた時とそれほど大きく変わっていないが、前は安全だという PR だったが、今は事故があるたびに安全の見直しを重ね、何重にも安全を期していると言うストーリーが強調されていた。若者グループと老人グループが説明を受けていた。

8 月 29 日（水）
大間あさこハウス

車で 2 時間程移動し、大間のあさこハウスへ。熊谷あさこさんは、津軽海峡に面した下北半島の突端、大間町で建設中の大間原発の用地買収を拒み、たった一軒で闘い続けた。そこにログハウスを建て、引っ越し準備をしているところで、2006 年、急死された。現在は、娘の小笠原厚子さんが、その意思を引き継ぎ、あさこハウスを守っている。厚子さん自身も、2017 年、不慮の事故で大怪我をされている。まさに命懸けの抵抗だ。

大間原発のフェンスが続き、入口は非常にわかりにくい。しかも、入り口付近には、守衛がいたり、監視カメラがあったりして、その圧迫感は半端ではない。有刺鉄線に囲まれた細い細い草道を通って、ようやくたどり着いたあさこハウスは、季節の花が咲き乱れ、山羊や犬がいて、とてもメルヘンチックな雰囲気である。風は強めだが、気持ちのいい気候。お庭でコーヒーを頂きながら話を聴く。

大間の街中に母の実家があって、ここと半々、行き来して暮らしている。ふだんは草むしりしたり動物たちの世話をしたりと、自然を大切に生活することがテーマ。運動の部分は少しで、訪ねてくる人もそう多くはない。自分は 15 歳で大間を出たので、母がやってきたことについてまったく知らなかった。157 名の地権者がいたが、「そんな変なものを海に流してはいかん、豊かな大間を守らなければいけない」と母だけが売らなかった。外からも内からも四方から圧力あったが、「どれだけこの海と

自然が大事か。いつかわかるべ」と言っていた。狂言強盗事件があって、刑事事件として裁判になり、大々的に報じられたため、初めて知った。

自分は原発も何もまったく知らなかったが、そこから亡くなるまでの 4 年、母を助けるようになった。突然亡くなったのでショックは大きかった。函館から週末通っていたが、母はずっと元気だった。健康診断でも何ら問題がなかったのに、ある日、急に危篤だと電話がきて、ツツガムシにやられたという話だった。68 歳だった。本人はまだまだ生きるつもりだったろうから、何も聞いていなかった。でも、母ならどうしたかなと考えながらやっている。この家も、支援の人たちも手伝ってくれたが、母と自分で作った。母は何でも自分でする人だった。

娘と決めて、町長選にも出た。反対している人もいるという意思表示をしたかった。葉書（公道を保つために、あさこハウスに葉書を送り、郵便配達をしてもらうという運動）の方法を考えたのも娘。今、29 歳で、今は自分のことをしたいと、東京でフリーターをやっている。

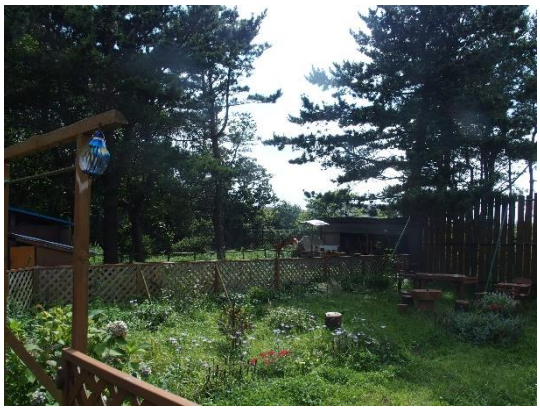
あさこハウスに手紙を出そう
プロジェクト

大間原発の敷地内にあるあさこはうすには道が一本通じている。東電が閉鎖目的でこの道の交通量をはかり始めたところから、郵便配達員がこの道を通る回数を増やすことで撤去を防ごうと始められた。葉書にメッセージを書いて送ろう！

〒039-4601
青森県下北郡大間町大字大間字小奥戸 396　あさこはうす内
小笠原厚子様

こんな状況のなかでも、明るくパワフル、自然体の厚子さんに、「どこからそんな力が沸いてくるんですか」と尋ねると、少し考えて、「守りたいものがある。大間の自然、大事な人。その気持ちが人よりちょっと強いのかもしれない」という答えが返ってきた。六ケ所村の菊川さんもそうだったが、女性たちは暮らしのなかに思想があり、その延長線上にごく自然な行動があるのだ。すごいなあと思う。なにしろ、たった一人の抵抗によって、大間原発は工事がストップしているのだ。一人の力がこんなにも大きいなんて。

お話している途中、何度も原発工事の人たちが近くにやってきた。一日何度か巡回に来るそうだ。車でやってきては、何かを測定している様子（そぶりなのか？）。原発の建屋はすぐそこに見えていて、仕事をしているが、原発工事はストップしたままだ。「あさこハウスに葉書を出そう」の葉書やひじきを買って、あさこハウスを後にする。



8 月 29 日（水）～30 日（木）

下風呂温泉

その夜は下風呂温泉に宿を取る。2014 年にも来たことがあり、公衆浴場で見た大きな龍の入れ墨の入ったお姉さんのことを思い出す。大湯に行って、後は宿で。お湯は熱く、ぬるめ、あつめとあるが、ぬるめも熱い。茨木から来たという女の子が熱がっていたら、地元のおばあちゃんが水を入れたらいいんだよと、私は熱い方にも挑戦、みなさんに感心された。

宿は貸し切り状態。本当かどうか、前日と翌日は満室だと。お風呂では、旅館の親戚という女性と一緒でいろいろしゃべる。同世代くらいの感じだが、その人は隣の風間村に住んでいるらしい。ここは新島襄が

昔泊まったことから、同志社と交流があるそうだ。いろいろ聞いてくるのでプロジェクトの概要を伝えると、「凄い人と会ったんですね！」と。沿岸部のことは言うが原発には触れないので、福島も大変と言うがスルー。やはりタブーなのだろう

観光客も少し増えたということだった。

院生たちは、フィールドワーク中、車が溝にはまったということで、3 名が遅刻。懇親会でのプレゼンはさんざんで、夜つかまえて指導する。思わぬハプニングで、事前にやるはずだった現地打ち合わせができなかったのだろうと後で思う。

8 月 30 日（木）
むつへ

朝、中村さんをむつの図書館まで連れて行き、館長である桜井さんのインタビューに同席する。サードプレイスとしての図書館の役目についての話は面白かった。貸し出し冊数の多い少ない等、いろいろ言われるので、図書館の居場所としての機能などについても、まとめていく必要があると思っている。ここにはギャラリーがあるので、地域のグループが展示をしたり、ピアノがあるので、ギャラリーコンサートがあったり、地域の交流の場にもなっている。利用機関へのアンケートなどやってみたいとおっしゃっていた。

お昼は、名物「おおみなと海自カレー」を食べるが、”No Curry, No Peace”の広告になんだか皮肉を感じる。中村さんを児相に送り、恐山詣でをする。レンタカーの返却に行き、今回気になっていたことを聞いてみる。これまで、むつには乗り捨てのできるレンタカー会社が一軒しかなかったはずなのに、今年あらたにできたのかどうかである。この 1 年で数軒できたそうだ。観光客が増えたのか、その理由を聞くと、東通りや大間の作業員など原発関連が多いらしい。自衛隊関連施設が増え、最後に

8 月 31 日（金）
支援者支援セミナー

8 年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」、協力団体が年々増え、こちらも、院生 7 名、総勢 11 名という大人数での参加となった。開始前に市長と懇談。忙しくてお疲れのようで、「子育てする時間がない。イメージだけで、ほとんど家にいない」とぼやいていた。若く人気の高い市長だ。

今年の支援者支援セミナーは、スタッフ参加者も入れると百名近い人数となった。半分が民生委員、下北半島の各市町村で福祉に関わる公務員、福祉施設の職員、看護師、保育士、警察、児童相談所の職員等の多職種が集まる。いつものように、地元の事例をもとにグループに分かれて検討した。今年の事例は、メンタルヘルスの問題を抱えた母子世帯の子育て。昨今、メンタルな問題を抱え、親族の支援もうまく受けられない母親のケースが増えている。提供者からは、フォーマルな社会資源、インフォーマルな社会資源を有効に機能させるにはどんな支援が考えられるかという問題提起があった。

事例の紹介から、むつにおいて、日頃から、多職種連携で手厚い支援が行われている様子が伺える。それでも困難はつきものなので、皆で知恵を出し合った。半数近くが初参加というにも関わらず、最初から議論が盛り上がるのは、きっとリピーターたちが引っ張ってくれているのだろう。

アンケートでも、「具体的な地元の事例を民生委員や福祉 関係、立命館の院生と検討していくなかで、様々な意見を聞くことができ、大変勉強になりました。今後の支援に役立てていきたいと思います。ありがとうございました」「エコマップ、広げる、前を向く等、これからの参考にしたいと思います。たいへんありがとう ございました。また来年も参加希望です！」などたくさんの声をもらった。困難よりも家族の持つ力に着目し、それを地域で支え合えるよう地域をエンパワーできるといい。

夜の部のお父さん応援セミナーは男性オンリーのため、女性陣は夜のフィールドワークとして、むつを案内してもらい、セミナー終了後に合流して交流会。

受付

東日本・家族応援プロジェクト in むつ
～本州のてっぺん下北半島から 家族の笑顔を～
プロジェクトで大切にしたいこと

～本州のてっぺん下北半島から 家族の笑顔を～

北の防人大湊
安渡館

東日本・家族応援プロジェクト in むつ

CURRY
PEACE

9月1日（土）
漫画トーク

翌日は漫画トーク。 漫画展の感想には、「漫画展示パネルはいろいろな自分の奥にしまってあった想いがインスパイアされるものでした。直接被災のことを扱わないけれど、過去に経験した何かや、これから起こるかもしれない何かを思い、そのことを少し大事にする、そういう気持ちを引っ張り出してくれます。ガレキ撤去じゃない復興支援、目立たないけれどホッとできる支援をありがたいと思っています」「毎年参加するようにしています。子どもが不登 校から引きこもりになり、もう 8 年にもなります。小学校、中学校、高校と大事な時期を 自宅でじっと過ごしているので、母としては不安でいっぱいです。でも、私の好きなことをして、あまり子どもを追い詰めないで生活していきたいと思います。未来なんてないけど、今を生きています」などの声があった。 プロジェクトもあと 2 年、その後どうしていくのかが話題に上るようになっている。

2018 年 10 月 多賀城

事前勉強会

今年、修士課程に入ってきた増尾香苗さんは、災害看護を専門とする看護師で、災害救援者 DMAT（災害派遣医療チーム）として東日本大震災発災 2 日後に多賀城に入り、 3 日間医療救援活動を行った。その時の経験を考えていたところに、本プロジェクトで出版した『臨地の対人援助学-東日本大震災と復興の物語』に出会い、立命館大学に入学してきたというのだ。当然のように、プロジェクトに参加し、多賀城チームのメンバーとなった。私たちが継続的に関わってきた多賀城の被災直後の様子はどうだったのだろうか。貴重な機会なので、プロジェクトに先立って、増尾さんの話を聞かせてもらうことにした。

増尾さんは、救護班の第一班として出動することになり、医師 2 名、看護師 3 名、事務職 3 名の計 8 名が、3 月 12 日 15 時に救急車両 2 台で出動した。出動してまもなく、福島の原発事後が報道され、放射能漏れの恐れがあり，南から向かう救護班は撤退するかそのまま待機した方がよいということになった。原子力災害訓練を受け、放射能汚染を想定して放射能探知器を準備していた増尾さんのチームは、車のエアコンを止め、外気をできるだけ遮断し、気象情報をもとに風上になる北側を走行した。北陸自動車道、盤越自動車道、東北自動車道を経由し、1 日がかりで、3 月 13 日 16 時 15 分に宮城県の霞目駐屯地に到着した。

活動 1 日目は、高松赤十字病院救護班の仮設診療所に合流し、石巻市民病院からのヘリで搬送されてきた 130 名のうち 28 名の治療対応、重症な患者から仙台市内の病院に救急搬送した。ほとんどの人が津波に流され、低体温だった。また， 海岸の病院が津波に襲われ，屋上に避難した患者がヘリで運ばれてきた。13 日から 14 日午前までは途切れることなく被災者が運ばれ、治療に追われたが、急に被災者が運ばれてこなくなった。無線や災害対策本部の情報は混乱を極め、何が起きているのか全くわからなかった。現状を推察するに、このままここで待機するだけではだめだと車で状況把握に出発した。想像を絶する状況に、二手に分かれ、14 日午後より、3 名は巡回診療を開始した。

人が見当たらないため避難所に避難していると判断、カーナビで学校へ向かった。報道されている多賀城体育館の前には国境なき医師団や他の救護班の車両があったため、救援車両が停車していない小さな小学校へ行った。100 人ほどがいて、2 時間ほど診療活動を行い、次の避難所へ向かった。そこには 300 人前後の避難者がいて、3 人で診れるか心配になり、トリアージを行った。大声で自己紹介をし、「診療を望まれる方、歩ける人はこちらに集まってください」と声をかけ、集まった軽症の人たちには看護師一人が血圧測定を行い、増尾さんと医師が動けない人を診て回った。悪化する可能性のある人の対応については、災害対策本部に継続支援を要請した。

巡回診療を終え、霞目の仮設診療所に戻り、状況を報告、翌日も再度巡回診療を行うことにした。2 日目のその夜は、夜間の搬送がないと自衛隊から連絡があって、暖房付きの自衛隊のテントで仮眠すること

になった。夜間に震度5の余震があり、本来使っていた医療テントは倒壊していた。

最終日である 15 日も、支援が届いていない学校や体育館を探した。多賀城小学校には 400 人以上の避難者がいたが、食べ物は家族でマリービスケット 1 袋のみの配給。津波で薬が流された人が多く、高血圧、不整脈、発熱、不安を訴える人々の対応に追われた。津波から必死で走って逃げたことを話す子どもたちと、涙をこらえて見守るお母さん。みな我慢強く、気遣いまでしてくれる。すべての診療を終了し、行きと同じルートで帰路に着いた。

増尾さんが体験した被災地の様子、被災者の人々の声にあらためて緊迫感が走った。私たちは長期支援で、初めて多賀城に入ったのは 1 年半後だった。被災体験もいくらか聞かせて頂いていたが、これまでおつきあいしてきた多賀城の方々の顔を思い浮かべながら、あらためて、その体験の凄まじさに震える思いだった。同時に、そんななかを生き抜いてきた人々や救援活動に身を投じてこられた人々への敬意でいっぱいになった。

10 月 5 日（金）
支援者交流会

チエックインして、17 時ロビーに待ち合わせ。院生 2 名は、13 時から 3 時間、NPO の語り部ツアーに参加したそうだ。震災を機に東京から U ターンし、地域の資源を活かしながらその活動で得た利益を地域活性に還元する市域再生型ビジネス「タガの柵」。タブレットを片手に街中を歩き、それ

ぞれの地点で、震災時の様子を動画や写真で見せながら説明してくれたそうだ。その方の友達は、津波にのまれ、なんとか車外に出たが流されてしまったとのこと、私たちが宿泊するキャッスルプラザホテルの外階段に流れ込んだところでホテルの方に見つけてもらい、低体温で動けない体を支えてホテルのお風呂に入れてもらって助かったそうだ。この辺りでは3階以上にいないと津波にのみこまれてしまった。近隣のマンションの3階に住んでいた別のお友達は、津波襲来時に周辺から助けを求める声が夜通し聞こえていたが、助ける手段がなく身動きができず、その内、声は静まっていったという経験から PTSD のような状態になってしまったとのこと。厳しい話だ。ぜひ、私もこのツアーに参加してみようと思った。

宿に荷物を置いて、会場となるTSUTAYA図書館へ。駅周辺は復旧復興工事を終え、初めてここに来た頃とはすっかり様変わりしている。薄暮れのなかライトアップされた図書館には、若者を中心に結構な人がいた。

18時から支援者交流会。すっかりお馴染みになった面々との再会を喜ぶ。2 年目の館長中島さんとお話したが、実家は石巻、大川小学校の対岸で、10日両親と連絡取れずあきらめかけていたところ、ようやく実家に行ったら、ふつうに新しい洗濯物が干してあったそうだ。どんな思いだったことだろう。昭和 8 年の大津波で家が流され、流された家が集まって小高いところに家を建てたので、部落は助かった。父は6歳でそれを経験、祖父からもいつも地震が来たら逃げろと言われてきた。もちろんその時の状況にもよるが、過去の経験が生かされ、伝承が残っているところでは助かっている人が多いのだ。

元図書館長で現在は下水局におられる丸山さんは、相変わらずフレンドリーに院生たちに話を聞かせてくれる。多賀城の災害対策の基本は雨水対策で、下水局の 80% の予算はこのために組まれているとのこと。6 万人ほどの人口なのに、排水ポンプが6カ所もあるほど、平坦で海抜が低い土地ゆえの災害対策の要となっている。都会で決定的に困るのが水問題であり、とにかく下水・感染防止対策が急務であるそうだ。

震災発生時はたまたま休みだった。被災時に海辺沿いの地帯は工業地帯から流れてきたタールまじりの砂のせいで、自宅はあきらめざるを得なかった。家族の無事を確認し、すぐに避難所の班長としての役割を果たし始めた。当初250人で開設されたが、急遽100人の追加があり、狭い体育館を効率的にかつ安全を確保するために、ビニールテープを張って通路を確保しながら全員で区画整理を行った。ペットと共に避難してきた人たちには、学校長に掛け合って特別に教室を用意してもらった。「公僕は市民のために寝てはいけない、食べてはいけない」と思いがちな職員たちには、食事や休息の必要性を唱えた。どこからともなくやってきて、大きな力を発揮してくれたボランティアの存在にも助けられたとのことだった。

10 月 6 日（土）
民話と絵本と遊びのワークショップ

午前は、鵜野先生のコーディネートのもと、多賀城民話の会、おおぞら保育園のみなさんとのコラボによって、「民話と絵本と遊びのワークショップ」が開催された。早くから来て待ってくれていた親子や、たまたま通りがかった子どもたちなど、入れ替わり立ち替わり 40 名ほどが参加した。

最初は、多賀城民話の会の皆さんによる「ふるさと民話語り」。多賀城民話の会のみなさんは、子どもたちが喜びそうなおもしろい民話をたくさん準備してくれており、お父さんやお母さんたちをも魅きつけていた。

おおぞら保育園の保護者、２人のお母さんと１人のおばあちゃんが持参してきた絵本を読まれた。日常のやりとりが感じられるアットホームなひとときだった。保育士さんたちは、ウクレレを弾きながら、手遊びしたり、『最後だとわかっていたなら』のす詩を大判の手作り絵本にしたものを読んでくれた。これは、子どもを亡くした母親が書いた詩で、2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロの時に多く読まれたものらしい。

鵜野先生による伝承遊びでは、お手玉やゴム飛びを楽しんだ。事前に練習した「一かけ二かけて」に合わせてのお手玉回しは小さな子どもたちが楽しめ、けん玉やゴム飛びでは、男の子が張り切っていた。少し大きな子が高いゴム飛びに挑戦し、小さいきょうだいを抱えて飛ばせてやるなどほほえましい場面が繰り広げられた。「最初できなかったのができるようになって嬉

しかった。(10 歳以下男性)」「1 歳の息子も楽しそうにしていた。(20 代女性)」「続けて欲しいです。(30 代女性)」「私のような老人でも参加して、生きる力をもらいました。(70 代女性)」など、さまざまな世代から反響があった。

今年の漫画展は 2 階奥のオープンスペースでの開催で、今週から月末までの長期間開催となる。奥まった場所なのでわかりにくいが、3 階のギャラリーより気軽に入りやすい。漫画トークは、午後、1 階のオープンスペースで行われた。毎年楽しみに遠方から来て下さる人から、通りがかりにちょっと足を止めて聞いている人まで参加の仕方はいろいろだが、30 名ほどが参加してくれた。「いろいろなことに巻き込まれながら、それでも人は生きていける。それが元気の元でしょうか???何かよくわからないけど、楽しい時間でした。(50 代女性、2 回目)」「団先生のお話と冊子は毎回何度読み返しても心に染み入るものがあり、私たちの日常生活が（家族を思いやり、行動に移すこと）いつも大切なんだ！ということをあらためて強く思った。ありがとうございました。(60 代女性、4 回以上参加)」などの反応を頂いた。

古文書レスキュー

プログラム終了後は、多賀城市立文化センターに移動し、臨床心理士である上山眞知子先生（東北大学災害科学国際研究所IRIDeS）、パートナーの歴史学者モリス先生（宮城学院女子大学）のお話を聞いた。今回のテーマは、「ふるさとの歴史を救う意味―心理社会的支援としての歴史資料保全の可能性」で、明日訪問する石巻市門脇地区の本間英一さん宅の土蔵とそこに保管されていた古文書や非文献資料を例にとって、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（宮城資料ネット）による保全活動（レスキュー）の意義、このプロジェクトに心理学者が関わっていくことの意味について話された。心理学はマクロ的な視点で人と関わるが、災害復興支援はマクロの視点に時間や歴史的流れを含めて関わる必要があるとのことだった。

古文書レスキューは、元々、阪神淡路大震災後に神戸大学の奥村先生らが歴史資料ネットワークを立ち上げたのがきっかけで全国に広がった。地元の私人が持っている文書が廃棄されるのを、きれいにし、データ化したのち、原本を個人に返却する。歴史的資料を保存し直すことで、①文書内にある災害に関する記載が、今後の対策に大いに役に立つ　②災害によりすべてを失った被災者たちに、自分のルーツやアイデンティティに関わる大切な記録がその中に豊富に残されている　③庶民の識字率が高く、16～19 世紀の資料がこれほど残っているのは日本だけ（UNESCO が世界記憶遺産として興味を持っている）とのことである。戦後の農地改革から古文書は廃棄される傾向が続いており、そこに高齢化による深刻な跡継ぎ問題と大災害が影響し、上記のような価値の高い資料消失の危機となっている。この活動は災害ボランティアとしての側面も大きく、地域の古文書保全運動に大学生や高齢者の方が協力し、参加することで若い人には帰属意識が芽生え、高齢者には効力感につながる。

レジリエンスの高い人の特徴は、被災したことをいつまでもくよくよと悩まず、「これで良かった。ここから自分たちで新しい街づくりをしよう！」と立ち上がれる人、社会生活技能が高い人、様々な環境（人・物・金・情報）をどう使ったらよいのかを知っている人、災害対応ではなく、災害前からのリスクに対応できる人だそうだ。これが減災そのものに繋がってもいく。院生の、多賀城の人々は行政が悪いなど不満を言わなかったのではとの感想については、各避難所に行政が入って管理できていたことが皆に伝わっていたことと、被害の大きさにも関係しているだろうとのだった。たとえば被害が大きかった石巻では、行政自体が大きな被害を受けたために、十分に機能し得なかったとのことだった。

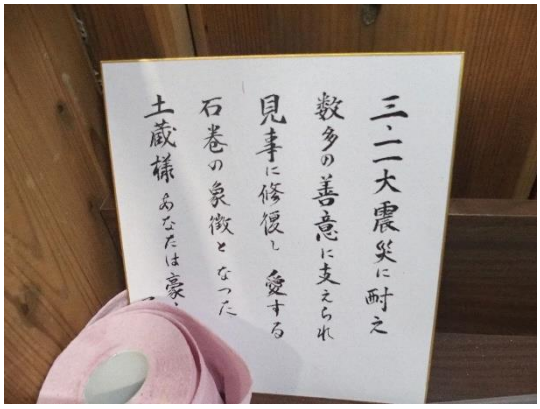
10 月 7 日（日）
本間英一さんの土蔵

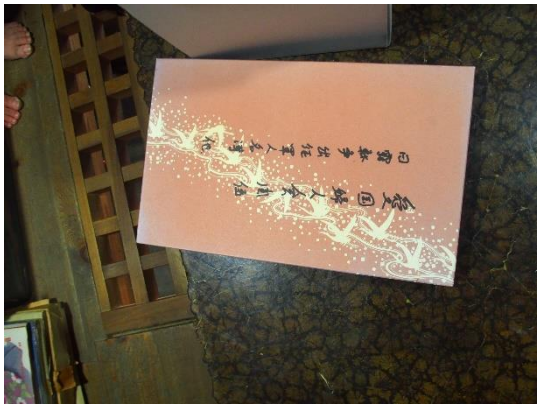
　朝、多賀城駅から仙石線で約 1 時間、石巻駅に到着し、タクシーに分乗して門脇地区の日和山の麓に建つ土蔵の所有者である本間英一さんのお宅を訪れた。本間家は、近世から近代にかけて廻船業、金融業、醸造業を営み、石巻有数の資産家だった武山家の流れを汲む。石巻は北上川河口に位置し、ここから仙台藩の御穀米が江戸に運ばれており、廻船業で財を成した資産家が生まれたという。

　本間さんは、写真ファイルを見せながら、震災時の話を聞かせてくれた。強い揺れが 3 分間続き、津波が来るとアナウンスがあった。本間さんが経営するテニスコートは海抜 6 メートルで、津波の到来は地震から 15 分程度とされていたが、実際には 1 時間後で、まずはその間にテニスコートの事務所に家族 9 名で避難した。津波の来襲とともに日和山に上って被害を免れたが、日頃から備蓄していた物資は、逃げる時には持ち出せず、流されてしまった。

　日頃から訓練していた門脇小学校では、いつもの避難場所である日和山にすぐに避難したことで、在校していた生徒は全員無事だった。すでに帰ってしまっていた 7 名が残念ながら亡くなった。学校のある地区での津波の高さは 6ｍを超えた。多くの車が流されてぶつかりあい、このあたりはプロパンガスだったこともあって、あちこちで火災が起こり、3 日間燃え続けた。近くにある日本製紙のパルプが大量に流されたことにより、足の踏み場もなかった。

　本田さんたちは、近くの 7 世帯で 1 ヶ月


三、一一大震災に耐え
数多の善意に支えられ
見事に修復し 愛する
石巻の象徴となった
土蔵様 あなたは豪



2011/06/23

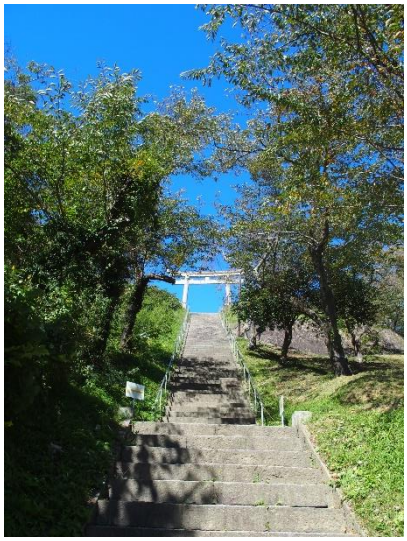
共同生活をした。避難所にも 3 日間食べるものがなく、指定避難所でなければ弁当が２ヶ月くらい届かなかった。初日から盗難被害にも遭った。電気が通ったのは 70 日後、竈で暖をとり、山の中腹で湧水を求め、助かった世帯から食料を持ち寄って生活した。灯油とアルコールは海から大量に流れてきたものを利用した。ボランティアがこの地域に入ってきたのは、2 週間ほど経って道路が開通してからだった。

２つあった土蔵の１つは全壊したが、今残っている方は１階のみの浸水であったため、２階に置いてあった古文書や書籍、道具類とともに無事だった。そんな中、4 月 8 日から古文書レスキューのため東北大学のチームがやってきて活動開始。1 世紀くらい前の祖父母の時代の持ち物や雑誌の付録地図や、廻船業を営んでいた頃の船荷の記録などが残されており、レスキュー活動の対象となった。当時の紙ベースの原本は、きれいに保存箱に整理されて戻ってきているが、データもきちんと残されているとのこと。

残った土蔵は、建築調査の結果、壊さずにすむことになった。宮城資料ネットのサポートと全国から寄せられた募金 370 万円と行政からの助成も得て、2 年かけて修復した。石巻の震災メモルアルとして保存継承していくことを決め、展示資料パネルなどを作成して 2014 年から一般公開をスタートさせたという。私たちも見学させてもらったが、土蔵には、江戸時代の出納帳や調度品、昭和初期の世界地図や旅行カバンなど、珍しいものが所狭しと陳列されていた。

本間さんは、飄々と説明・案内してくださった後、テニス仲間と楽しそうにテニスをしに行ってしまった。自然体なその姿に緊急時のしなやかさを重ねて見えた。

その後、私たちは日和山に上ってみた。



東日本震災圏域創生 NPO センターいしのまき寺子屋

その後、石巻駅前のカフェにて、太田美智子さんのお話をうかがった。被災した子どもたちを支援するいしのまき寺子屋の事務局長をされていたが、2017 年 9 月末で活動を終了し、震災後 6 年半の「小さな物語」を『まよわないように　3.11 石高トレ室避難所物語 1』という報告書にまとめて今年 3 月に発行したところだった。

この地域の子どもたちは、月 1 回のさまざまな種類の避難訓練を受けてきており、保育園の子たちも、被災時お昼寝中だったが、起こされても泣きもせず、スムーズに服を着て避難したという。小学生は、日和山に避難する訓練で、最後尾がどこに到達しているかで安全確認し、高学年が低学年の面倒を見る縦の繋がりを大切にした訓練を実施してきたということで、だからこそ、実際に地震と津波が押し寄せてきた時にも、高齢者をしっかりサポートすることができた。もちろん、高齢者は高齢者で、小規模多機能居宅介護施設では通所者に毎日リハビリテーションの名目で、独歩での自動車の昇降訓練を課していたとのことだった。親が迎えに来られない子どもたちは、石巻高校にお願いして避難生活をしたが、地域住民の災害への意識の高さと比べると、行政の対応のまずさがあり、石巻高校の利用許可がなかなか出なかったり、結局トレーニング室以外は使用できなかったりしたようだ。

避難所の運営にあたっては、たまたま阪神淡路大震災で避難所運営を経験してきた人がいたなど、偶然良い人材が揃った。

困ったのは、勘違いボランティアたち。具体的に聞くと、上から目線で「俺に従えば間違いない」と「格好良い自分」に酔っているタイプの人、物資を送りたいと言いつつ、自分の悩み相談や思い出話を語りたがる人、平常時に地元で冴えないことから「一発逆転」的な発想でやってきた人、何が必要か、どう動くか、想像力を働かせられない指示待ちの人、他者に対するリスペクトができない人･･･など、その共通点は、自己中心的であること。なかには変わる場合もあるかもしれないが、往々にして来てもらっても困るだけだったとのことで、太田さんが面接をして、そういう人はきっぱり断ったという。反対に必要とされるボランティアは、上記の逆で、さらに自分が何者なのか、何ができる人間なのかをよく知っている人である。こういった困った出来事や人が押し寄せてきても、他の地区に比べてうまく乗り切れた要因としては、漁業・加工業が中心だったこともあり、普段から男性の少ない町を動かしていたのは女性だったので、現場にいた女性たちが仕切ることに慣れていたという文化背景が理由ではないかとおっしゃっていた。

これまで男性中心の避難所運営による問題をたくさん聞いてきたが、女性を中心に安全な避難所運営やボランティア受け入れの判断を行っていたところがあったと知って驚くとともに、それも女性が力を持つ浜文化の反映と聞き、やはり日常の在り方が非常時にそのまま映し出されるのだとあらためて思った。また、子どもたちを保護されるべき弱者と見なすのではなく、主体的・能動的に行動すべき生活者と見なすことによって、結果的に子どもたちの自立心と自信を育てていくことにつながったということだった。納得できる話だ。

どこで聞いてもボランティアに来てくれた人たちの否定的側面は語られにくいが、明確に教えてもらえたことはありがたかったし、頼もしいと思った。これこそが、いしのまき寺子屋の力の源だったのだろう。

つづく